

現代民俗学会第二七回研究会

生活のなかの感性と美学

発表者

俵木 悟 (成城大学)

「良い踊りの民俗誌—踊りの評価の文化的構成—」

丸山 泰明 (元国立歴史民俗博物館)

「今和次郎と田園生活—造形の観察と実践の場としての郊外—」

横川 公子 (武庫川女子大学)

「生活の中の手工芸における美と感性の力」

コーディネーター

俵木 悟 (成城大学)

2015 年

4 月 26 日 (日)

11:00 ~ 12:15

成城大学

3 号館 311 教室

日本の民俗学は長らく、「美」の問題を正面から論じることを意図的に避けてきたように思われる。これは諸外国と比較して、日本民俗学の顕著な特徴のひとつである。例えばアメリカ民俗学では、1970年代に Dan Ben-Amos が民俗 (folklore) を、'artistic communication in small groups' と、また Dell Hymes が民俗学 (folklore study) を、'the study of communicative behavior with anesthetic, expressive, or stylistic dimension' と定義づけたように、表現文化の「美的」な性格を論じるのは、民俗学の主要な研究関心であった。あるいは中国、韓国などでも、文芸・工芸・舞踊・演劇などの「芸 (artistic skill)」は民俗学の最も民俗学らしい研究領域であり続けている。

日本でも民俗学で美を論じることが試みられていた時代があった。昭和2年に結成された民俗芸術の会はその代表的な組織であり、その結成にも関わった柳田國男は、民俗資料の三部分類の心意現象のなかに「趣味」を位置づけ、「善と美はともにこの一般的趣味の下に包括されるもの」と述べている。その系譜が途絶えた一つの要因は、後の民俗学が客観的・実証的な科学たることを標榜するなかで、価値の評価に関わることを徹底的に避けてきたことがある。

私たちはここで、人びとの生活のなかに表れる美の問題に、新しい視点で挑んでみたい。柳田の「趣味」の言葉にヒントを得て、これをものごとの良さや美しさを感じ取る能力(=感性)と捉えなおす。すると、それが特定の社会文化的な状況でどのように発現し、それに基づいて人びとが何を選択してきたか、生活を美しく豊かなものとするためにどのような技や知識を生み出し伝えてきたか、といった問題が民俗学の課題として立ち上がってくる。日々の生活実践としての「こだわり」や「工夫」のなかに美意識を見出し、それらが時代的・社会的な規範性をもちながらも、創意工夫によって更新されていく様相は、狭義の表現文化に止まらず、民俗学が取り組むあらゆる研究領域のなかに見出せるであろう。こうした問題を広義の「美学」として論じる可能性を開きたい。(文責：俵木悟)

俵木 悟 「良い踊りの民俗誌―踊りの評価の文化的構成―」

従来の民俗芸能研究が等閑視してきた芸の評価に関して、鹿児島県の大里七夕踊を事例に、人びとの記憶、踊り手の個人史、各時代の社会状況など多くの要因が相乗して踊りの評価が文化的に構成される様相を論じる。

丸山 泰明 「今和次郎と田園生活―造形の観察と実践の場としての郊外―」

東京の郊外化が進み、農村の民家が失われていくと共に新しい住宅が建てられていくなかで、民家研究や考現学の業績で著名な今和次郎が美しく楽しい住まいについてどのように考えていたのかを検討することにした。

横川 公子 「生活の中の手工芸における美と感性の力」

生活の中の手工芸は、近代化の中で、暮らしの基底に沈殿した美や感性を引き受けてきた砦の一つである。暮らしを飾ること、味わうこと、そして生きることに見出だせる美的こだわりには、未来への予兆が炙り出せる。